

## 看護大学生の進路選択と進路支援のニーズに関する実態

(看護大学生/進路選択/進路支援)

福間美紀\*・廣野祥子\*\*・長田京子\*・森山美香\*\*\*・大森真澄\*\*\*・木村真司\*\*\*

## Course Choice and Career Support Needs of Nursing Students

(nursing students / course choice / career support)

Miki FUKUMA\*, Sachiko HIRONO\*\*, Kyoko OSADA\*\*, Mika MORIYAMA\*\*\*  
Masumi OOMORI\*\*\* and Shinji KIMURA\*\*\*

The purpose of this research was to clarify that nursing students course choice and career support needs. And it was to consider the way of our support.

Using an anonymous self-administered questionnaire, we received answers from 43 nursing students (second grade; 12 people, third grade; 31 people) who had participated in a career seminar.

As the course choice, being a nurse, public health nurse, and nurse midwife ranked high in descending order, both at the time of enrollment and the survey. More than half of the respondents had yet to decide their future career plans, although many of them expressed their wish to obtain higher qualifications. With regard to choosing on one's course, the respondents tended to give priority to their interests (52.5%) and aptitude (67.4%). Regarding career support, many respondents expressed their wish to receive such support from the time of enrollment (88.4%) as well as after graduation (86.0%). Our survey results suggest the need for nursing students to receive career support including career seminars from an early stage as well as career guidance to facilitate the realization of their vocational aptitude.

本研究は、看護大学生の進路選択と進路支援に対するニーズの実態を明らかにし、進路支援の在り方を検討することを目的とした。

看護大学生の進路支援に関する無記名自記式質問紙調査を作成し、進路セミナーに参加した看護大学生43名(2年生12名, 3年生31名)から回答を得た。

進路希望は、入学当初及び現在いずれも看護師、保健師、助産師の順に多かった。将来のキャリアプランは半数以上が未定であったが、上級資格取得希望者も多かった。進路選択は、自分の興味(52.5%)や適性(67.4%)を重視する傾向があった。進路支援については、入学時(88.4%)からおよび卒業後(86.0%)も支援を希望しているものが多かった。看護大学生には、早期からの進路セミナーや自分の適性を知るなどのキャリアガイダンスを含めた進路支援が必要であることが示唆された。

### はじめに

日本では、平均寿命の延伸による高齢化、疾病構造の変化や医療の高度化などにより、医療機関や保健医療福祉施設等での看護職の確保と質の保証が課題となっている。看護職の質の保証では、高度な看護実践

能力を備えた看護職の育成に向け、看護教育の大学化が推進されている。しかし、急速に進む大学化の一方で、看護大学生の職業に対する意識は低く、促進されていない<sup>1)</sup>という課題も指摘されている。それに伴い、看護大学卒業の新卒看護師の離職が大きな問題になっている。2010年には、新卒看護職員8.9%で前年度(9.2%)より改善傾向がみられるものの、いまだ高い割合を示している<sup>2)</sup>。

そこで、各施設においては、看護師の人材確保に関する対策として、新卒看護師の離職を予防するための

\*島根大学医学部看護学科基礎看護学講座

\*\*島根大学医学部看護学科地域看護学講座

\*\*\*島根大学医学部看護学科臨床看護学講座

教育支援であるプリセプター制度<sup>3)</sup>の導入や看護実践における到達目標評価を含むクリニカルラダーなどの臨床看護実践能力開発プログラムの作成・実施などの取り組みがなされている。さらに、2011年には、看護師等人材確保の促進に関する法律の改正による卒後臨床研修の努力義務化が開始された。また、離職した看護師の再就職支援のためのナースセンターの設置<sup>4)</sup>や最新の医療や看護技術に関するセミナー・研修<sup>5)</sup>などの取り組みなどがなされてきた。

看護大学では、看護師や保健師志望などがはっきりしないまま入学した学生<sup>6)7)</sup>や看護職への適性を葛藤し、看護職意識が芽生えないまま就職決定する者<sup>8)</sup>がいる。一方で、上級資格取得や専門領域を意識して就職を希望する学生などもおり<sup>9)</sup>、多様な背景やニーズのある学生への進路支援が課題となっている。そこで、文部科学省の「大学生の職業力育成支援事業」として早期離職防止のキャリア形成モデルなど、職業アイデンティティの醸成の取り組みがはじめられつつある。

看護大学生に対するこれまでの進路支援は、職種（看護師、助産師、保健師など）についてのガイダンスを主とした進路セミナーの実施や医療機関のインターンシップ<sup>10,11)</sup>や教育機関のキャリアセンターの設置<sup>12)</sup>などが実施されている。しかし、進路選択を迷う学生に対する支援はいまだ確立されておらず、看護大学生の進路希望、進路選択や学生が必要とする進路支援を検討した研究は少ない。

そこで、本研究は、看護大学生の入学当初からの進路選択や学生の必要とする学生支援のニーズの実態を明らかにし、看護大学での進路支援の在り方を検討することを目的とした。

なお、本研究での進路選択とは、看護大学生が卒後の進路を選ぶことと定義して用いた。進路選択には、職種選択（看護師、助産師、保健師など）のほか、大学院への進学や卒後の上級資格取得の選択が含まれる。

## 方 法

### 1. 対 象

研究対象は、地方都市にある大学で主催された進路セミナー（以下、セミナー）の参加者67名のうち2, 3年生の看護大学生43名（有効回答数43名、有効回答率100%）とした。セミナー参加者のうち教職員（15名）、一般（6名）および進路が決定している4年生（3名）は除外した。

なお、このセミナーは、看護学生、高校生、保護者、教育関係者、学内外の人を対象に開催されたものであ

り、活躍中の看護師、助産師、保健師、認定看護師、専門看護師を招き、現職を選択した経緯や実際の活動などを聞いて、参加者の進路選択に役立ててもらってもらうことを目的としている。

対象者の履修状況は、2年生が看護専門科目の基礎看護学領域の一部と臨床看護学領域、地域看護学領域の概論を履修中の段階であった。3年生は、専門基礎科目のすべてと受け持ち患者の看護を展開する基礎看護学実習Ⅱを終えており、臨床看護学領域、地域看護学領域の講義・演習科目を履修中であった。なお、臨床看護学領域と地域看護学領域の臨地実習前の段階であった。

### 2. 調査期間

平成23年7月12日

### 3. データ収集方法

看護大学生の進路選択や進路支援に関する独自の調査用紙を作成し、進路セミナーに参加した看護大学生に調査用紙を配布した。回答された調査用紙は、セミナー終了後、回収箱への投函により回収した。

調査内容は、対象者の学年、入学時及び現在の進路希望及び将来のキャリアプラン（上級資格取得、進学等に対する希望）、進路選択（進路決定で優先すること、相談する相手、活用する情報、進路決定に影響する要因）、進路支援（進路決定で困難なこと、支援に対する希望、必要な支援内容）について、回答選択方式で尋ねた。

### 4. 分析方法

対象者の学年、進路希望、進路選択、進路決定、進路支援について記述統計量を求め、2年生と3年生の比較についてFisherの直接法を用いて分析した。統計処理には、PASW Statistics 18を用いた。

### 5. 倫理的配慮

調査用紙は、無記名自記式質問紙調査を用い、調査内容に個人が特定する項目を加えないようにした。また、対象者には、調査の目的、方法、研究参加についての判断が任意であり、参加の有無に関わらず不利益を被らないこと、個人のプライバシーは保護されること、報告会や学会等に公開することなどについて文書で説明し、回収箱への投函をもって研究への同意と判断した。

## 結 果

## 1. 対象者の概要

対象者はセミナーに参加した看護大学生43名である。対象者の属性は2年生12名(26.1%),3年生31名(67.4%)であった。

## 2. 対象者の入学時及び現在の進路選択希望と将来のキャリアプラン

対象者の入学時の進路選択希望は、看護師が最も多く31名(72.1%),次いで保健師11名(25.6%),助産師7名(16.3%),養護教諭6名(14.0%),進学2名(4.7%),未定が1名(2.3%)であった。現在の進路選択希望も、

看護師が最も多く29名(67.4%),保健師12名(27.9%),助産師10名(23.3%)、養護教諭7名(16.3%),進学4名(9.3%),未定が6名(13.0%)であった。それぞれ職種別の進路選択希望は、2年生、3年生の間で統計的に有意な差がなかった。現在の進路選択希望は、入学当初の希望と比べ2年生が保健師希望から1名、3年生が看護師希望から2名、養護教諭希望から1名の変更していた(表1)。

将来的なキャリアプランは、わからない18名(41.9%)が最も多く、未定8名(18.6%)と合わせると50%程度みられた。将来のキャリアプランの展望がある学生は、認定看護師12名(27.9%),専門看護師10名(23.3%)と上級資格取得志向がみられた。なかでも3年生では、

表1 入学時と現在の進路選択希望

		全体 43	2年 12	3年 31	<i>p</i>
看護師	入学時	31 (72.1)	8 (66.7)	23 (74.2)	n. s
	現在	29 (67.4)	8 (66.7)	21 (67.7)	n. s
保健師	入学時	11 (25.6)	4 (33.3)	7 (22.6)	n. s
	現在	12 (27.9)	3 (25.0)	9 (29.0)	n. s
助産師	入学時	7 (16.3)	2 (16.7)	5 (16.1)	n. s
	現在	10 (23.3)	2 (16.7)	8 (25.8)	n. s
養護教諭	入学時	6 (14.0)	1 (8.3)	5 (16.1)	n. s
	現在	7 (16.3)	1 (8.3)	6 (19.4)	n. s
進学	入学時	2 (4.7)	0 (0.0)	2 (6.5)	n. s
	現在	4 (9.3)	0 (0.0)	4 (12.9)	n. s
未定	入学時	1 (2.3)	0 (0.0)	1 (3.2)	n. s
	現在	6 (14.0)	1 (8.3)	5 (16.1)	n. s

単位は人数(%)

n. sは $p>0.05$

表2 将来のキャリアプラン

		全体 43	2年 12	3年 31	<i>p</i>
上級資格取得					
	認定看護師	12 (27.9)	3 (25.0)	9 (29.0)	n. s
	専門看護師	10 (23.3)	2 (16.7)	8 (25.8)	n. s
	特定看護師	1 (2.3)	0 (0.0)	1 (3.2)	n. s
進学					
	大学院進学	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	n. s
そのほか					
	看護系教員	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	n. s
	研究者	1 (2.3)	0 (0.0)	1 (3.2)	n. s
	未定	8 (18.6)	2 (16.7)	6 (19.4)	n. s
	わからない	18 (41.9)	6 (50.0)	12 (38.7)	n. s

単位は人数(%)

n. sは $p>0.05$

専門看護師志望の学生が2年生と比べ、多くなる傾向がみられた(表2)。

### 3. 進路選択の動機

進路選択の動機となる要因について表3に示した。対象者は、進路選択の決め手に「自分の興味を優先する」23名(53.5%)が最も多く、次いで「出身地を優先する」16名(37.2%)、「実習病院を優先する」9名(20.9%)と答えている。3年生では、2年生と比べ「出身地を優先」させる傾向が見られた。

進路選択についての相談は、家族35名(81.4%)、友人26名(60.5%)、先輩20名(46.5%)、看護の専門領域の教員19名(44.2%)、個々の学生の指導教員18名(41.9%)にするものが多く、進路担当教員が8名(18.6%)のみであった。3年生では2年生と比べ「家族」「先輩」「専門領域の先生」に相談する傾向が見られた。

進路選択に活用する情報は、「先輩」28名(65.1%)、「家族」27名(62.8%)からの情報や「臨地実習」26名(60.5%)での経験、「担当教員」24名(55.8%)からの情報の他に「病院見学・インターンシップ」20名(46.5%)

も活用していた。3年生では、「臨地実習」での経験や「インターネット」からの情報、「病院見学・インターンシップ」など、能動的に進路選択に関する情報取得を行っていた。

進路決定に影響する要因について表4に示した。進路決定の要因は、「自分の適性(性格)合っているか」29名(67.4%)、「教育・研修システムの充実」27名(62.8%)、「職場の人間関係」27名(62.8%)、「勤務体制が合っている」25名(58.1%)がそれぞれ50%以上を占めていた。学年別の傾向は、2年生が「教育・研修システムの充実」10名(83.3%)と「自分の適性(性格)に合っているか」8名(66.7%)、3年生が「職場の人間関係」22名(71.0%)と「自分の適性(性格)に合っているか」21名(67.7%)で多い傾向が示された。

### 4. 進路決定の困難さと進路支援ニーズ

進路決定の困難さと進路支援ニーズについて表5に示した。2、3年生であっても進路決定で困っているものがみられた。その中には、「準備がわからない」18名

表3 進路選択の動機となる要因

	全体	2年	3年	<i>p</i>
	43	12	31	
<b>進路選択で優先すること</b>				
自分の興味	23 (53.5)	7 (58.3)	16 (51.6)	n.s
友人の意見	1 (2.3)	0 (0.0)	1 (3.2)	n.s
出身地	16 (37.2)	3 (25.0)	13 (41.9)	n.s
実習施設	9 (20.9)	3 (25.0)	6 (19.4)	n.s
<b>相談する人</b>				
家族の意見	35 (81.4)	9 (75.0)	26 (83.9)	n.s
友人	26 (60.5)	8 (66.7)	18 (58.1)	n.s
先輩	20 (46.5)	5 (41.7)	15 (48.4)	n.s
指導教員	18 (41.9)	7 (58.3)	11 (35.5)	n.s
進路担当の教員	8 (18.6)	2 (16.7)	6 (19.4)	n.s
専門領域の教員	19 (44.2)	4 (33.3)	15 (48.4)	n.s
<b>活用する情報</b>				
家族からの情報	27 (62.8)	8 (66.7)	19 (61.3)	n.s
友人からの情報	17 (39.5)	5 (41.7)	12 (38.7)	n.s
先輩からの情報	28 (65.1)	8 (66.7)	20 (64.5)	n.s
担当教員からの情報	24 (55.8)	6 (50.0)	18 (58.1)	n.s
進路セミナー	20 (46.5)	5 (41.7)	15 (48.4)	n.s
臨地実習	26 (60.5)	6 (50.0)	20 (64.5)	n.s
インターネット	11 (25.6)	2 (16.7)	9 (29.0)	n.s
就職情報誌	11 (25.6)	1 (8.3)	10 (32.3)	n.s
施設からの就職案内	6 (14.0)	2 (16.7)	4 (12.9)	n.s
病院見学・インターンシップ	20 (46.5)	5 (41.7)	15 (48.4)	n.s

単位は人数(%)

n.sは $p>0.05$

表4 進路決定に影響する要因

	全体 43	2年 12	3年 31	<i>p</i>
教育・研修システムの充実	27 (62.8)	10 (83.3)	17 (54.8)	n.s
地域に根ざしている	13 (30.2)	4 (33.3)	9 (29.0)	n.s
代表者の人柄	12 (27.9)	2 (16.7)	10 (32.3)	n.s
職場の人間関係	27 (62.8)	5 (41.7)	22 (71.0)	n.s
最先端医療をしている	11 (25.6)	4 (33.3)	7 (22.6)	n.s
自分の適性(性格)に合っているか	29 (67.4)	8 (66.7)	21 (67.7)	n.s
キャリアアップの支援体制の充実	16 (37.2)	4 (33.3)	12 (38.7)	n.s
実家に近い	3 (7.0)	2 (16.7)	1 (3.2)	n.s
勤務体制が合っている	25 (58.1)	5 (41.7)	20 (64.5)	n.s

単位は人数(%)

n.sは $p>0.05$ 

表5 進路決定の困難さと進路支援

	全体 43	2年 12	3年 31	<i>p</i>
進路決定で困難なこと				
情報不足	9 (20.9)	5 (41.7)	4 (12.9)	n.s
進路決定が難しい	17 (39.5)	2 (16.7)	13 (41.9)	n.s
ポイントがわからない	9 (20.9)	2 (16.7)	6 (19.4)	n.s
準備がわからない	18 (41.9)	4 (33.3)	12 (38.7)	n.s
自分に合っているかわからない	9 (20.9)	4 (33.3)	5 (16.1)	n.s
看護職になることに悩んでいる	4 (9.3)	2 (16.7)	2 (6.5)	n.s
支援に対する希望				
入学時から必要	38 (88.4)	10 (83.3)	28 (90.3)	n.s
卒後も必要	37 (86.0)	10 (83.3)	27 (87.1)	n.s
必要な支援の内容				
セミナー	22 (51.2)	8 (66.7)	14 (45.2)	n.s
キャリアガイダンス(適性検査などを含む)	22 (51.2)	4 (33.3)	18 (58.1)	n.s
出身地ごとの情報提供	12 (27.9)	5 (41.7)	7 (22.6)	n.s
職種ごとの情報提供	23 (53.5)	3 (25.0)	20 (64.5)	0.03

単位は人数(%)

n.sは $p>0.05$ 

(41.9%),「進路決定が難しい」17名(39.5%)が多かった。学年別では、2年生が「情報不足」5名(41.5%),3年生が「進路決定が難しい」13名(41.9%)であった。

進路支援については、入学当初から希望している学生が38名(88.4%)おり、卒後の進路支援を希望しているものも37名(86.0%)であった。進路支援の具体的な希望内容は、「職種ごとの情報提供」23名(53.3%)のほか、現職者の紹介などの「進路セミナー」や自己の適性などを含めた進路支援である「キャリアガイダンス(適性検査などを含む)」をとともに22名(51.2%)が希望していた。学年別では2年生が「進路セミナー」での支援を8名(66.7%)が希望しており、3年生は「職種ごとの情報提供」20名(64.5%),「キャリアガイダンス(適性検査などを含む)」を18名(58.1%)が希望してい

た。3年生は、2年生と比べ「職種ごとの情報提供」を有意に希望していた( $p=0.03$ )。

## 考 察

### 1. 看護大学生の進路選択とキャリアプラン

看護大学生は、看護職に対する志望の弱さ<sup>6,7)</sup>や低学年の看護大学生の看護職志望が一時低下する<sup>13)</sup>ことなどが問題となっている。しかし、本研究対象者である看護大学生は、入学当初から看護職のなかでの進路希望の割合に大きな変化がみられなかった。多くの看護大学生が中学校、高校時代から看護体験、職場体験などを経験することで、看護職への興味が高まり、イメージを持てること、将来ビジョンが見通せる機会が増え

ている<sup>14,15)</sup>。また、看護大学生は、早期体験実習<sup>16)</sup>や臨地実習や看護専門科目<sup>17)</sup>の学習機会によって、看護の専門職としての職業意識が変化することが指摘されている。対象者も同様に、1年次からの早期体験実習、基礎看護学実習などの保健福祉施設や医療機関での実習の体験学習があることや臨床看護及び地域看護学により学習機会が得られている。対象者は、これらの学習機会により自分なりの目指す看護職のイメージを持っていると推察される。

将来的なキャリアプランは半数が未定であるが、認定看護師や専門看護師などの上級資格についての関心興味も高いことが分かった。対象者は、先行研究による看護系短大生<sup>9)</sup>や看護大学生<sup>18)</sup>と同様の結果を示し、上級資格に対する認知が拡大しつつある。さらに、本研究対象者は、セミナーで認定看護師・専門看護師から直接ガイダンスを受け、上級資格の認知から徐々にキャリアプラン形成の糸口ができつつあることがうかがえた。

## 2. 看護大学生の進路選択の特徴

先行研究において、大卒看護師の職業選択の動機が職場の雰囲気、教育システム、休暇、給与などを優先し、自己の職場適正などは見られなかった<sup>19,20)</sup>。しかし、本研究対象者では、これらの選択要件も高い割合を示していたが、第一の進路選択要件として自分の適性を挙げており、看護職に対する自分の適性を重要視していることが分かった。

本研究対象者である看護大学生は、先輩からの情報を活用しており、また病院見学やインターンシップによる情報を活用できることや、これらの情報源から職場の雰囲気や教育システムの実態を理解できることを知っていると考えられる。しかし、自分の適性については、これらの情報からのみで推し量られるものでないことや新卒看護師の離職の要因として問題となっていること<sup>21-23)</sup>があり、進路決定するにあたって重要な要因としてしていると考えられる。また、看護大学生は、臨地実習経験や講義での教員の臨床経験談により進路選択が影響されるため<sup>13)</sup>、本対象者も卒後の進路を決定するには至っていないと考える。さらに、看護大学では看護師、保健師など様々な進路選択が可能であることにより、将来の進路が自分の適性に合っているかをじっくり検討し、4年間の中で慎重に決定したいという思いがあると推察する。

## 3. 進路支援に対するニーズと今後の支援

本研究対象者は、差し迫って進路決定をする時期に

ない2, 3年生であり、進路決定の困難さや準備についての知識不足などを示し、入学時から職種ごとの情報提供やキャリアガイダンス、セミナー、進路支援を希望していた。また、進路選択は、学年別にみると2年生が進路選択希望もほとんど変わらず、家族や先輩、担当教員などの周辺の人たちの情報を活用し、就職先の教育・研修システムなどを参考に自分の適性(性格)を含めて検討していた。一方、3年生は入学時から進路希望の変更や経験した臨地実習や就職情報誌を活用し、職場の人間関係なども鑑み、自分の適性を量っていた。

本対象の看護大学生は、入学当初から職種の選択を漠然と決めているが、キャリアガイダンスや職種ごとの情報提供などの進路支援を希望していた。それは、本学では、統合カリキュラムによりすべての学生が看護師及び保健師免許の取得可能であることや、養護教諭過程を選択できること、同じ看護職でも進学して助産師免許の取得など様々な選択肢が用意されていることなどが理由と考えられる。また、学生は学年進行とともに臨床看護学や老年看護学、地域看護学と様々なライフサイクルや生活の場の看護を学んでいく。これにより看護大学生は、自己の開かれた可能性とそれぞれの職種に対する適性などを考えるようになると推察される。

そこで看護大学での進路支援は、1年生あるいは2年生に家族や先輩からの情報だけでなく、様々な場で実践している看護職の職業紹介を含んだ進路セミナーを実施する必要があると考える。さらに、3年生では、看護職者の活動の場での役割機能を講義や臨地実習で経験しているため、自分が希望する職種・職場適性に関する進路支援の取り組みであるキャリアガイダンスが必要であることが示唆された。

## 研究の限界

本研究は、看護大学生の2, 3年生を対象とした進路選択及び決定要件と進路支援のニーズに関する実態である。対象者は、看護学領域の科目について講義・演習を履修中であり、臨地実習経験が少ない看護大学生である。そのため、すべての臨地実習を終え、実際に行う4年生の進路選択時の決定要因と異なる可能性もある。今後は、すべての臨地実習を終え、4年生が実際の進路選択や決定要件を明らかにする必要がある。

## まとめ

看護学生の進路選択と進路支援のニーズを調査した。

入学当初及び現在も進路希望割合は変わらず、看護師、保健師、助産師の順に多かった。将来のキャリアプランは半数以上が未定であったが、上級資格取得希望者も多かった。進路選択は、自分の興味や適性を重視する傾向があった。進路支援については、入学時からおよび卒後も支援を希望しているものが多かった。看護大学生には、早期からの進路セミナーや自分の適性を知るなどのキャリアガイダンスを含めた進路支援が必要であることが示唆された。

## 謝 辞

本研究に当たり調査にご協力いただきました看護学生の皆様に対して深謝いたします。

この研究は、「平成23年市民の生涯学習教育を支援するための公開講座並びに教育研究プロジェクト」の助成金により実施した。

## 引用文献

- 1) 白鳥さつき：看護学生の職業社会科に関する研究. 山梨医科大学紀要, 19, 25-30, 2002.
- 2) 公益法人日本看護協会：「病院における看護職員需給状況調査」結果速報, 2011.
- 3) 澁谷恵子, 三上智子：新卒看護職員の早期離職防止に関する一考察—看護学生の職場およびプリセプターに望むことから. 名寄市立大学紀要, 1, 23-29, 2007.
- 4) 看護師等の人材確保の促進に関する法律. 2011改正
- 5) 吉本照子, 青山美紀子, 辻村真由子他：平成21年度文部科学省「社会人の学び直志ニーズ対応教育推進プログラム」委託事業：訪問看護師として再就職したい看護職者を支援する学び直しプログラム開発. 千葉大学看護学部紀要, 32, 49-56, 2010.
- 6) 河村彰美, 中川雅子, 藤田淳子, 種池礼子,：看護学生における看護婦のアイデンティティの経営と志望理由・学習進度との関係, 京都府立医科大学医療短期大学部紀要, 10, 91-99, 2000.
- 7) 富田早苗, 横山美江：地域看護学実習時における学生の地域保健活動への関心度とその関連要因. 日本公衆衛生学会誌, 55(2), 101-106, 2008.
- 8) 山内栄子, 松本葉子, 山本雅子：現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程. 日本看護学教育学会誌, 18(3), 11-24, 2009.
- 9) 原田広枝, 山本千恵子, 北原悦子他：看護学生のキャリア志向とキャリア開発支援に関する研究. 九州大

- 学医学部保健学科紀要, 7, 13-21, 2006.
- 10) 柳橋礼子, 吉川久美子, 川名典子他：看護学生のための「インターシップサマープログラム」の評価. 日本看護管理学会年次大会講演抄録集, 8, 74-75, 2004.
- 11) 子安知恵美, 鈴木幸子, 大塚真理子他：看護学科における県内病院インターンシップ事業の試み. 埼玉県立大学紀要, 5, 153-157, 2004.
- 12) 吾郷美奈恵, 三島三代子, 林 健司他：看護基礎教育におけるキャリア支援と評価. 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 4, 73-79, 2010.
- 13) 畑瀬智恵美, 坂田三充, 紺谷英司：看護学生の看護職を目指すという職業意識に関する研究—新設看護学科に入学した学生の看護職への意識の実態. 日本看護学会論文集：看護総合, 40, 357-358, 2010.
- 14) 淘江七海子, 吉本千恵, 竹内美由紀他：看護学科受験生への大学説明会の内容検討—看護学校1日体験入学高校生と大学在学性へのアンケートから. 香川県立保健医療大学紀要, 2, 179-186, 2005.
- 15) 山口美晴, 未坐絃子, 下西澄江他：ふれあい看護体験が受験同期に及ぼす影響—看護学生へのアンケート調査より. 日本看護学会論文集：看護総合, 34, 66-68, 2003.
- 16) 阿部朋子, 重松豊美, 服部容子他：看護学生の看護職への志向の特徴—A 大学入学後1年の変化. 甲南女子大学研究紀要5, 33-40, 2011.
- 17) 宮脇美保子, 藤尾麻衣子, 島田千恵子他：4年制大学における看護学生の職業的社会化2年生を対象として(第2報). 医療看護研究3, 64-28, 2007
- 18) 曾田陽子, 小松万喜子, 川田智恵子：愛媛県立看護大学の教育改革に関する研究(7) 本学学部生の本学大学院への進学ニーズ. 愛媛県立看護大学紀要, 11, 125-132, 2005.
- 19) 宇城 令, 塚本友栄, 井上映子他：本学部卒業生の進路決定と職業継続に関する調査. 自治医科大学看護学ジャーナル7, 89-97, 2009.
- 20) 出口睦雄, 野田貴代, 川合奈緒美他：愛知きわみ看護短期大学卒業生の就職病院選択動機—第3期生の特徴—. 愛知きわみ看護短期大学紀要, 6, 41-51, 2010.
- 21) 荒川千秋, 細川淳子, 小山内由希子他：大卒新人看護師の支援のあり方に関する研究. 日本看護管理学会誌, 10(1), 37-43, 2006.
- 22) 平賀愛美, 布施淳子：就職後3か月時の新卒看護師のリアリティショックの構成要因とその関連要因の検討. 日本看護研究学会誌, 30(1), 91-107, 2007.
- 23) 山田美幸, 前田ひとみ, 津田紀子他：新卒看護師

の離職防止に向けて支援の検討：就職3か月の悩みと 47-54, 2008.  
6か月の困ったこと分析. 南九州看護研究誌6 (1),

(受付 2011年8月10日)